

第3回ぶっとびファンド 第1次審査のコメント

1. 総評

まず、コロナ禍が継続している中、いずれも意欲的かつ持続可能な取り組みの応募であったことに敬意を表します。何かと制約の多い社会経済状況が続く中、皆さんから寄せていただいたエネルギッシュな応募動画に鼓舞される思いがしました。一方で応募件数が15件と多く、審査員一同、頭を悩ませました。第2次審査にお進みいただく8団体を選考するつもりが10団体になってしまったことも、その悩みの深さの表れとご理解ください。

3分の応募動画で伝えられることは限られていますが、応募者と推薦者の思いや願いが、第三者にどのくらい届くのか、という点が評価の一つのポイントだったように思います。このファンドの採択・不採択に関わらず、何かの企画を実施する場合、様々な人々に協力や賛同や理解を求めることとなります。思いや願いを、より広く、より深く伝える技術を磨くことは、この先もぜひ続けてほしいと思います。

また、このファンドは小規模な助成なので、活動自体も小規模にならざるを得ないと思いますが、「小さいけれども外に向けて開かれている」ということが重要で、積極的に外に向けて開いていこうとする姿勢や、外に開くためのアイデアも、もう一つの評価のポイントだったと思います。

3回目を迎えるぶっとびファンドですが、回を重ねるごとに「アートで人とまちをしあわせにする」という目的が確実に伝わっているようでうれしく思います。そのアートは、本当に人やまちの方向を向いているのか。人やまちは、そのアートと出会って本当にしあわせになるのか。もちろんしあわせの定義は人それぞれですが、想像する力を武器とするアートの強みが活かしている提案からは必然的に、誰かをしあわせにしている姿が浮かび上がってくるように見えました。

2. 第2次審査に進めなかった皆様へのコメント

第2次審査のプレゼンテーションの時間が許せば、すべての応募者の話を直接聞きたいと思いました。通過者とそうでない方たちの差は本当にわずかで、審査員としては断腸の思いです。

残念ながら採択に至らなかったのは、ご活動の趣旨やユニークさ、熱い思いは十分伝わりましたが、「誰に」「何を」「どうするのか」といった具体的なことが見えづらいものや、ぶっとびファンドならではのチャレンジ精神が感じにくい応募は、泣く泣く候補から外させていただきました。

ぶっとびファンドはあと1回、応募のチャンスが残されています。また、コロナ禍で改めてアートの重要性が増しているところでもあります。もしまた申請して下さるのでしたら、みなさんの思いを、普段は一緒に活動していない人に伝えてみて、企画をより具体的にブラッシュアップしていくところから始めてはいかがでしょうか。

3. 第2次審査に期待すること

第2次審査で当初予定をしていたプレゼンテーションの数を増やすことにしたのは、3分動画だけではなく、直接話を聞いてみたい、聞かないと判断が難しいと思う応募が、1次審査の当落ラインに複数あったためです。ですので、第2次審査では、動画では語り切れなかった部分を説明してほしいのですが、「思いや願い」よりも「何をするのか」の説明を重視したいと思います。

また、「アートでまちと人をしあわせにする」という言葉をよく噛み締めていただきたいと思っています。人が、まちがしあわせになるかどうかというのは、片想いであってはいけないわけです。ぶっとびファンドの醍醐味は公開審査にあります。審査員も申請者も混じり合いながら、「アートでまちと人をしあわせにする」とはどのようなことなのかを語り合う機会です。あいにくオンラインでの開催ではありますが、あなたのプロジェクトがどのように私たちをしあわせにするのか、その夢に耳を傾けあい、議論し合えることを楽しみにしています。